

本の紹介

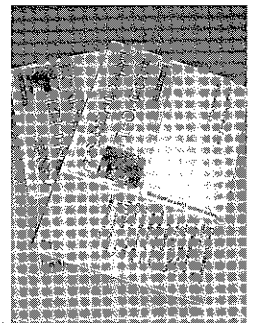
スィンティ女性三代記(上) 私たちはこの世に存在すべきではなかった

(ルードウィク・ラーハ編著/金子マーティン訳)

スィンティ女性三代記(下) 「スィンティ女性三代記(上)」を読み解く

(金子マーティン)

出版社/年:凱風社/2009年



千葉 美千子(北海道大学大学院・国際広報メディア研究科博士後期課程)

『スィンティ女性三代記(上・下)』は、ロマの女性たちの眼差しから編纂されたロマ史である。ローザの体験談は、彼女が老齢であったことから、編者であるラーハの聞き取りによって文章化されている。娘のギッタと孫のニコルは、家族との体験に照らした「自分史」を手記として書き下ろしている。そしてそこには、フィールドワークを何よりも大切にする研究者、金子マーティンの切なる「想い」が存在する。それぞれの女性たちの語りは、今なおロマに対してステレオタイプを抱く読者に、あるいは、はなはだしい時代錯誤をしている机上の研究者に、大きな衝撃を与えるだろう。

本書の上巻は、1923年生まれのローザ・ウィンターから娘のギッタ・マーテルへ、そしてギッタからローザの孫となるニコル・マーテルへと紡がれた、心の物語である。家族の絆や伝統文化が「私(たち)」という一人称で語られ、ナチス・ドイツによる迫害が、戦後、彼女たちに与えてきた/いる影響が赤裸々に描かれている。家族の思い出、心の交流、行政や警察との軋轢が、彼女たちの「肉声」を通して伝わってくる。ナチス・ドイツに拘留されながら、生還を果たしたローザ、収容所体験を持つ両親の元に生まれたギッタ、そして、家族の歴史を通じて、ホロコーストの記憶を「ごく身近なもの」としてとらえているニコル。三者三様の語りから、スィンティとして生きる「誇り」とスィンティゆえの「葛藤」が垣間見える。そして、ナチスの爪痕が、彼/彼女らの日常に重い影を落とし続けてきた/いることが胸に突き刺さる。たとえば、まだ小学生だったギッタは両親に尋ねる。「同

級生はみんな洗礼名の名付け親とかおじさんにおばさん、それににおばあさんやおじいさんなんかがいるの。私のおばあちゃんやおじいちゃんはどこ? タタ(父の呼称)、私だって親戚を訪ねたいわ」。長い沈黙の末、父は口火を切る。「私たちの親戚はいないんだよ。身内はみんな強制収容所で殺された」。彼女たちは、一面的な推察だけでは、歴史の真実を紐解けないことを私たちに教えてくれる。

本書の下巻では、自らも「複数の文化圏の影響を受けて育った」という金子が、彼女たちの証言に照らして、ナチスとその前後の時代におけるロマ政策を仔細に分析している。検討の対象は、ナチスの政策、ローザらロマも端役として出演させた映画監督レニ・リーフェンシュタールの不誠実さ、就学問題、強制収容所での女性たちの運命など多岐にわたる。さらに後半では、戦後も継続したロマに対する差別と、それらに対する彼/彼女らの自律的行動が収められている。一枚一枚の写真が、何かを語りかけてくる。多くのナチスの指令・訓令文書の翻訳もまた、ロマ政策の「計画性」を裏付ける貴重な資料となっていくだろう。

「ロマやスィンティの諸文化を日本人に伝えようとするのも重要だろうが、私がより訴えたいことは、第二次大戦期ヨーロッパでのロマやスィンティの運命である。それを認識することこそが、漠然としたロマに対する差別感を乗り越えることに寄与すると考えるからである」。この言葉に込められた金子の「想い」が、多くの人びとの心に届くことを願っている。

(ちばみちこ)